

## 「ハムレット第3独白」私論

## A Personal Essay on Hamlet's 3rd Soliloquy

江口 了太

EGUCHI Ryota

---

**Abstract:** *Hamlet* begins in the dark mood with horrible ghost scenes in the old castle of Elsinore, and ends up in a rather bright and calm atmosphere after catastrophic deaths of many people concerned. How could this be after such disastrous consummation? Hamlet is seriously concerned about life and death which is clearly shown in his impressive soliloquy: “To be, or not to be: that is the question...” And yet in the end, having finally accepted Laertes' wager, Hamlet says to Horatio, “If it be now, 'tis not to come; if it be not to come, it will be now; ...the readiness is all.” Could this not be called his ‘enlightenment’ in life?

---

**Keywords:** Hamlet's 3rd Soliloquy ハムレットの悟り 翻訳家・中村保男 英語能研究家・上田邦義 「英語能・ハムレット」 Enlightenment ソロー トランセンデンタリズム  
The readiness is all.

---

やや個人的なことから書き始めるのをお許し願いたい。今、私は本棚の隅から、一冊の古い日記帳を取り出しているところである。そのくすんだ緑の背表紙にはかすかに *English Diary 1950 Obunsha*<sup>1</sup> という字が読み取れる。私が最初に「英文日記」なるものを買ったときのものである。昭和25年(1950)、この年の3月、私は新制中学を卒業し、4月には町工場の工員として働きだし、同時に夜間高校生として人生をスタートしたのであった。

どのページにも英米文学に関する情報がちりばめてあり、それは英語に魅せられはじめていた若者にとって、宝物のような一冊であった。当時の私の英語力では、ただ幼稚な「小学生日記」を間違いだらけの英語で書き綴ったしろものである。そして各ページに記載された英米文学に関する記事は、貧困な読解力では歯が立たないものだったが、おぼろながら異国の文学への憧れを掻き立てられたのであった。その中のひとつにシェイクスピアの第3独白が坪内逍遙の訳で、しかもローレンス・オリヴィエの写真つきで紹介してある<sup>2</sup>。『ハムレット』との出会いである。いや、正確にいうと、このとき私はローレンス・オリヴィエの演ずる『ハムレット』の映画をすでに観ていた。だから “To be ,or not to be: that is the question:...” の文字は、あの塔頂の城壁の上に身を横たえ、短剣を胸に突きつけている俳優オリヴィエの言葉、眼下に荒

れ狂う海を目にして自殺願望を抱いた青年のせりふとして焼きついていたのである。当時 15 歳の私は、思春期の入り口にいた。自分の青春がその後どのような道筋をたどるのか知る由もなく、ただ美しい女性の内部にも想像を超えた、はかりがたい謎があることに衝撃を受け、主人公ハムレットに強い感情移入をした記憶がある。

それから、約 60 年。改めて第三幕 第 1 場 56—88 のそれを読むことにする<sup>3</sup>。

To be, or not to be: that is the question:  
 Whether 'tis nobler in the mind to suffer  
 The slings and arrows of outrageous fortune,  
 Or to take arms against a sea of troubles,  
 And by opposing end them? To die: to sleep; 60  
 No more; and by a sleep to say we end  
 The heart-ache and the thousand natural shocks  
 That flesh is heir to, 'tis a consummation  
 Devoutly to be wish'd. To die, to sleep;  
 To sleep: perchance to dream: ay, there's the rub;  
 For in that sleep of death what dreams may come 66  
 When we have shuffled off this mortal coil,  
 Must give us pause; there's the respect  
 That makes calamity of so long life;

みずから命を絶つべきか、否か。この第 1 行を私の記憶のなかでは「世に在るべきか、在らざるべきか、それが疑問じゃ」と読んでいる。だから、この独白全体を生か死かの選択に迷うハムレットを描いているものと勝手に決め込んでいた。しかし、ここは「死」一般について思索するハムレットの姿を描写しているところである。死後の世界から帰ってきたものは誰もいない、がゆえに不可解な世界である。もしかしたら、死の世界は眠りの世界かもしれぬ。ならば悪夢を見続けることもありうる。死は、現世の苦悩を救うことにはならないではないか……。

ちなみに福田恒存訳ではつぎのようにはじまる<sup>4</sup>。

生か、死か、それが疑問だ、どちらが男らしい生き方か、じっと身を伏せ、不法な運命の矢弾を耐え忍ぶのと、それとも剣をとって、押し寄せる苦難に立ち向かい、とどめを刺すまであとには引かぬと、一体どちらが。いっそ死んでしまったほうが。死は眠りにすぎぬ—それだけのことではないか。眠りに落ちれば、その瞬間、一切が消えてなくなる、胸を痛める憂いも、肉体につきまとう数々の苦しみも。願ってもないさ

いわいというもの。死んで、眠って、ただそれだけなら！ 眠って、いや、眠れば、夢も見よう。それがいやだ。この生の形骸から脱して、永遠の眠りについて、ああ、それからどんな夢に悩まされるか、誰もそれを思うと——いつまでも執着が残る、こんなみじめな人生にも。

つまり、主人公ハムレットは、生か死か、あるいは現世での過酷な運命を耐え忍ぶ生き方か、それともその運命に逆らい、立ち向かって生きることこそ、高貴な生き方なのかという。ここでは生死の問題を、生き方の問題にからめて、一般論として自己の性格の、決断力のなさを表白しているのであって、決して生か死かだけの逡巡ではないのは明白である。

続いて作者シェイクスピアは死とは何か、死後の世界はどういうものか、眠りか、ならば夢を見ようぞ、その夢にも苦しみの夢がある。だから人は死をおそれ、逡巡するのではないか、という。

独白は続く。

For who would bear the whips and scorns of time,	70
The oppressor's wrong, the proud man's contumely,	
The pangs of despised love, the law's delay,	
The insolence of office and the spurns	
That patient merit of the unworthy takes,	
When he himself might his quietus make	75
With a bare bodkin? Who would fardels bear,	
To grunt and sweat under a weary life,	
But that the dread of something after death,	
The undiscover'd country from whose bourn	
No traveler returns, puzzles the will	80
And makes us rather bear those ills we have	
Than fly to others that we know not of?	

さもなければ、誰が世のとげとげしい非難の鞭に堪え、権力者の横暴や驕れるものの蔑みを、黙って忍んでいるものか。不実な恋の悩み、誠意のない裁判のまどろこしさ、小役人の横柄な人あしらい、総じて相手の寛容をいいことに、のさばりかえる小人輩の傲慢無礼、おお、誰が、好き好んで奴らのいいなりになっているものか。その気になれば、短剣の一突きで、いつでもこの世におさらば出来るではないか。それでも、この辛い人生の坂道を、不平たらたら、汗水たらしてのぼって行くのも、なんのことはない、ただ死後に一抹の不安が残ればこそ。旅立ちしものの、一人としてもどってきたためしのない未知の世



readiness is all: since no man has<sup>8</sup> aught of what  
he leaves, what is't to leave betimes? Let be. 235

これは翻訳家・中村保男が言うように「生か死か…」と逡巡したハムレットが透徹した現実家に変貌してしまったことを表している。中村はこの大きな変貌について「そのあいだにハムレットの胸中にはどんなことが起こったのか… 最大の謎である」といい、『ハムレット』は心理劇ではなく、行動劇だからこの心理の転換の説明がないことを指摘しつつも、「多くの演出家がこの劇を暗黒の場面から始め、澄みきった光の中で終わらせている」ことは、ハムレットが自己の宿命に目覚め自分自身になりきって死地におもむいたことを、認めているのだろう、と解説している。<sup>9</sup>

実はこの中村保男の解説の曖昧さを、払拭する解釈が英語能研究家・上田邦義<sup>10</sup>によってなされていることを紹介したい。彼は1970年代、アメリカでの研究生活のかたわら、マサチューセッツ州立大学とタフツ大学で「能と禅」を講じた。そこでH.D.ソロー(Henry David Thoreau 1817-62)のトランセンデンタリズムに、東洋思想の「悟り」の精神を見出して、日本の伝統文化である能楽を英語で演ずることの可能性に挑戦していた<sup>11</sup>。ここで禅の精神とソローの唱えた自然観、両者に相通ずるものとは何かについて触れておく必要がある。

そもそも禅とは仏教の修行法・実践法である。心身を統一し悟りの境地に至るのを目的とする。悟り、すなわち「空」の認識である。一方、トランセンデンタリズムを確立したソローは、行動的で実践主義者であった。自らコンコードの郊外の森に分け入り、2年間の思索の後に『ウォルデン、森の生活』*Walden, or Life in the Woods* (1854)としてその実験的な生活と思索を発表した。内省を重視し、自然の美を礼賛し、生物、無生物を問わずあらゆるものに真性が宿るとし、人間の能力は理性よりも直観である、自然の摂理を鋭く意識することで潜在能力が高められると考えた<sup>12</sup>。実践法としての禅の「悟り」と一致する。

この「悟り」をモチーフに上田は創作能「英語能・ハムレット」<sup>13</sup>を書き上げた。1994年、ウェスタン・オーストラリア大学のレクチュア・デモンストレーションでソロー・パフォーマンスとして発表された“Enlightenment”<sup>14</sup>の部分を引用する。

## ENLIGHTENMENT

Hamlet: To be, or not to be—

To be, or not to be: is *no longer* the question.

If it be now, it be now, 'tis not to come, not to come;

If it be not now, not now, yet it will come, it will come;

The readiness is all.

There is a special providence in the fall of a sparrow,

Since no man knows aught of what he leaves;

A man's life is no more than to say 'one'—  
The readiness is all.

To be, or not to be: is *not* the question,  
But to live in the present is the only way of living;  
Infinity always resides in the finite,  
We defy augury—  
By living in the present moment,  
You may transcend this world,  
You may transcend present time—  
The readiness is all.

世に在るか、在らぬか、もはや問題ではない  
今来るべきものであれば、今来る あとでは来ない、来ないものだ  
今来ないものは来ない、でもあとで来る あとで来るのだ  
覚悟こそすべて  
すずめ一羽が落ちるのも神の摂理  
いつ死んだらいいのか、誰にも分からないのだから  
人間の一生など束の間のもの  
覚悟こそすべて

世に在るか、在らぬか、もはや問題ではない  
今を生きることが 生きるということだ  
無限は常に有限にあり  
前兆など気にはしない  
今を生きることこそ  
この世を、この時を超越できよう  
覚悟こそすべて<sup>15</sup>

万人だれもが死と向き合って生を生きている。そのときに過去を振り返ってはならない。上田は、今という現実を生き抜くことで時空を超えた生の喜びを感得することを、シェイクスピアの原文に“not”を加えることで訴えたのである。彼は日本の伝統文化の持つ芸術性を世界の人々に伝えたいという強い願望からシェイクスピア作品を能に乗せることに取り組んでいたのであるが、それは単にエキゾチックな異文化紹介ではなかった。シェイクスピア劇を《超絶主

義ドラマとしての能」すなわち「夢幻能」として翻案することであった。上田は彼の著作『「能・オセロー」創作の研究』の中で、「能風に演じるということは、その作品を能風に解釈する必要があり、そのために今回はじめてシェイクスピアの原文に私のことばを一語つけくわえた。“not”である。私は不遜を承知で、シェイクスピアのもっとも有名なせりふを否定したのである。」<sup>16</sup>（傍点原文のまま）とことわっているが、私はこの“not”が挿入されたことで、はからずもシェイクスピア『ハムレット』における、ハムレットの隠されている心理変化を読み解く鍵が発見されたと考える。とくに“the readiness is all.”に続く“since no man has aught of what / he leaves, what is't to leave betimes? Let be.”(V, ii, 234-235)「なによりも覚悟が肝要。人間、すてるべきいのちについてなにがわかっている？ とすれば、早くすてることになったとしても、それがどうだというのだ？ かまうことはない<sup>17</sup>」の中に「今を生きることこそこの世を、この時を超越できよう<sup>18</sup>」というトランセンデンタリズム、すなわち「悟り」の思想を読みとったのである。上田の透徹した芸術的センスによって、私は改めて「悟りの美学」というものを教えられた気がする。

#### 註

- 1 *English Diary 1950 The Ōbunsha Press*, 『英文日記』旺文社、昭和24年
- 2 同上 p.196
- 3 Kuniyoshi Munakata, *Selected Scenes from Shakespeare —Hamlet & Othello—*, 北星堂書店 昭和54年、p.74 以下、本稿のシェイクスピアによる作品の原文引用はこの書からである。
- 4 シェイクスピア原作・福田恒存訳『ハムレット』新潮文庫、平成16年 p.84 前記注1の『英文日記』の196ページに坪内逍遙訳が紹介してあるが、正確さにおいて、疑義があるので、本稿の訳文はとくに明記したものを除いて、福田恒存のものによった。
- 5 同上 p.85
- 6 同上 p.86
- 7 同上 p.186
- 8 ‘knows’ となっているものもあるが、ここでは Kuniyoshi Munakata, *Selected Scenes from Shakespeare —Hamlet & Othello—*, および William Shakespeare, *Hamlet, Prince of Denmark*, ed. Sanki Ichikawa and Takuji Mine, Kenkyusha, 1964 に従い ‘has’ とした。
- 9 シェイクスピア原作・福田恒存訳『ハムレット』新潮文庫、2004年 p.224 「解説」中村保男
- 10 上田邦義、旧姓・宗方、1934年 山形県鶴岡市生まれ、ハーヴァード大学大学院フルブライト研究員を経て、マサチューセッツ大、タフツ大、静岡大学、ネブラスカ大等を歴任、現在、日本大学大学院講師・静岡大学名誉教授。英語能/シェイクスピア能/創作・実践 国際融合文化学会会長 博士（国際関係）
- 11 上田邦義『「能・オセロー」創作の研究』勉誠社 1998年 p.54  
「能の動きは絶対的なものに見える。禅の深い境地をあらわすかのごとくに。しかし同時に、そのいわば静止の中に、例えばハムレットの深い不安をも表しうるのではないか。そして微妙な動きの変化が、絶望を希望に変え、そしてわれわれを時間の世界を乗り越えた「悟り」にさえ導いてゆくのである。その意味で、能とはトランセンデンタル・ドラマである」
- 12 山田正雄「ソローにおけるエマソンの影響」『融合文化研究』第7号、国際融合文化学会、2006年 p.24
- 13 Kuniyoshi Ueda, *Noh Adaptation of Shakespeare*, Hokuseido, 2001 p.33

---

<sup>14</sup> 同上 p.154

<sup>15</sup> 論者拙訳

<sup>16</sup> 上田邦義『「能・オセロー」創作の研究』勉誠社 1998年 p.65

<sup>17</sup> 小田島雄志訳『ハムレット』白水社、2005年、p.233

<sup>18</sup> 前ページに、*Noh Adaptation of Shakespeare* から ‘Enlightenment’ を引用したが、その第2スタ  
ンザ、最後の部分の拙訳参照。

## 参考文献

1. 『英文日記』旺文社、昭和24年
2. シェイクスピア原作・小田島雄志訳『ハムレット』白水社、2005年
3. シェイクスピア原作・福田恒存訳『ハムレット』新潮文庫、平成16年
4. 山田正雄「ソローにおけるエマスの影響」『融合文化研究』第7号、国際融合文化学会、2006年
5. Kuniyoshi Munakata, *Selected Scenes from Shakespeare —Hamlet & Othello—*, 北星堂書店、1979年
6. Kuniyoshi Ueda, *Noh Adaptation of Shakespeare*, Hokuseido, 2001
7. William Shakespeare, *Hamlet Prince of Denmark* ed. Sanki Ichikawa and Takuji Mine, Kenkyusha, 1964
8. Thoreau, Henry David, *Walden, or Life in the Woods*, the Easton Press, 1981